

円谷幸吉が生まれた昭和15(1940)年、日本は紀元(皇紀)2600年である。そして、世界を覆う戦雲に遮られて、日本はアジアで初めて開くはずだった東京オリンピックを中止している。

円谷幸吉は時代の子であった。昭和39(1964)年、円谷幸吉は東京オリンピックでピートリーとテッドピートを繰り広げた。迫り来るピートリーにスタンドの観客は総立ちとな

# 円谷は振り向かず

り、目の丸の波が揺れた。「円谷、振り向け」「振り向くんた、円谷」。しかし、円谷幸吉は振り向かなかった。テレビで見る円谷幸吉の顔は、ゴールを見つめて苦しそうにゆがんでいた。「ああ、もうこれで走らなくていいんだ」。ゆがんだ顔はそう言っていたのではない。幸吉の父、幸七さんは「わたしの教育が間違っていたのかもしれない」と言った。

小学校時代、運動会で後を振り向いた幸吉を「男は決して後を振り向いてはいけない」とすごい剣幕で怒鳴ったらしい。「振り返ることは恥ずかしいことである」。幸吉の自殺の原因はいろいろと取り沙汰された。しかし、自殺や殺人の動機は一つではない。いくつかの原因が重なって、動機となるのである。幸吉は椎間板ヘルニアとアキレス腱の年に振り返らなければなら

が、「メキシコ五輪があるから」と上司に横車を押されて破談になった。「4年は待てない」。程なく相手の女性は別の結婚に進んだ。「もう、走りたくない」。昭和39年、東京オリンピックの年に振り返らなければならなかったのは、日本人のすべてだったのである。円谷幸吉の遺書にはあまりにも有名である。テレビがすごい勢いで普及し

始めていた。「電気紙芝居」である。わたしの同級生では上志佐の屋崎武利の家が早かった。わたしたちは「力道山」と「快傑ハリマオ」を見るために屋崎武利の家へ通った。志佐から上志佐まで歩いて30分は優にかかったが、テレビのためには厭わなかった。大勢の人で、座敷の床が崩れた。屋下がりの志佐の町角には、黒塗りの頑丈そうな自転車が置かれていて、拍子木を打ち鳴らす紙芝居屋の親父が「タタミはオカエリ」とカラカラ声で叫んでいたものだが、だれも紙芝居を見る者はいなくな



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦元妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「一乗也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

(松浦市出身)